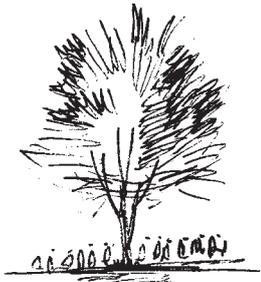


光の子



No.184 2018.4.3

●年間聖句 一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。
(ヨハネによる福音書12章24節より)



「道」

表紙絵・中島由起子

「春たしか」

みたらしの水あをあをと寒の入

戸袋にふゆる節穴日脚伸ぶ

寒明くるそよりそよりと風吹いて

春たしか路地に湧きたる子の声に

水音のひすがら即いて春田打

水の香のわけても濃きに夕ざくら

揚げ舟に波のひた寄る遅日かな

黛 執

(「春野」主宰)

うろうろする力 一緒に遊ぶ心

理事 稲塚 由美子

「責任担当制による家庭的処遇」で子どもたちを育てていこうとして設立された、この『光の子どもの家』ができてから三十三年が経つ。

ずっと責任を持って、ひとりひとりに対して、一対一の関係で、関係を作っていく。一人の担当者が子ども四名以内を丸ごと担当する責任担当制を採用し、家庭的な暮らしを目標に子どもたちの養育に当たってきた。

その間、巷では、「家庭的処遇」の元となる、ある意味手本としてきた普通の「家庭」なるものの中身に大きな変質があった。

まず目に見える形の変化としては、両親がいて子どもがいての血縁でつながる家族モデルが幻想となりつつあること。ひとり親家庭もあれば、ひとり暮らし家庭もある。同性同士の親家庭も実質的にはほどなくできよう。いい悪いということではない。いわゆる今までの「家庭」がもっているはずとされた、子どもたちを育む揺りかごとしての家庭の形が変わってきているのである。

形が変化したから中身が変わったというわけではない。変質の元凶は、日本がぐいっと舵を切ってきた「経済的な効率主義」だと思っっている。それは、家庭の構成者である人の心に内面化され、早く結果を出せ、うろうろする時間などあるものか、いち早く、一番の近道を見つけて駆け抜けよ、と人々を

追い立てる。こうして近視眼的に「無駄」と判断されたものは、価値がないとして排除される。誰も待てない。ミヒヤエル・エンデの名作『モモ』に描かれる「時間泥棒」だ。

効率がすべての価値観に、知らず毒されると、失敗を許さず、人に考える時間を与えず、人を管理する。「何やってるの」「これが一番いい方法に決まってるでしょ」「バカじゃないの」……。こうして家庭という閉鎖空間の中、特に大人と子どもの関係ではすぐ起こってしまいう上から目線の支配が始まる。

ここでは家庭に限定して話をすずめているが、これはたとえば企業、学校、行政施設、およそ人の営みの細部にわたって起こっている社会問題でもある。さて翻って、『光の子どもの家』では、創立以来三十三年が経ち、あらためて原点を問い直すことを、竹花施設長はじめ、それぞれの職員たちが、それぞれの「現場で」考え続けている。

「子どもを中心に、子どものために」という想いはあっても空回りになってしまうことも数え切れず

「私たち自身の様々な劣化とたたかわなければ」

「そんな乱暴な言葉使わないでほしい。もっとわたしを大切に。もっと話を聞いて——と子どもたちが言う」

いつのまにか上から目線になってしまいう自分たちがある、ということ。ま

た、日々起こる簡単ではないことたちへの対処への失敗、何より、その際の子どもたちの言葉・表情から学ぶのだから、というその心根だけが原点なのである。

また、職員の好きなことを中心に、それを楽しみにする子どもたちが集まって、「温泉同好会」、「肉会」、「チョコ会」、「ヘビ会」爬虫類好きの子どもたちとヘビカフェに行き、ヘビとふれあって楽しむ!?、これから、ゆつくりお昼寝をする「シエスタ会」(これいいなあ!)なんてのもできるかもしれないという責任担当外の大人と一緒に外出したりもある。担当の枠を超えて、一緒に遊ぶかかわりも大事だということである。

ただ居続けるだけでいい。ぐちゃぐちゃした暮らしを共にして、泣いて笑って怒って喜ぶ。その繰り返しがそが人を生かす。人を育む。それが『光の子どもの家』であることに変わりはないが、さらに開かれて、外からの風も吹き抜けるように感じる。うろうろすること、それ自体に力がある。外に向かつて立派に見せることなど微塵も考えず、正義と正論を振りかざすでもなく、その子どもへの大いなる共感を忘れないと、振り返りを忘れない。

それは、子どもたちが、人を信じ、「助けて」と言える人になることに大いに寄与するかもしれないとも思っている。子どもたちが生きて、よりよき人生を全うできますようにと願ってやまない。

看取り考(1) 去り行く人々に寄り添いながら

老健施設みゆきの丘施設長 仙道 富士郎

現在の職場、介護老人保健施設（以下老健施設）「みゆきの丘」にお世話になって、この三月で六年が過ぎる。あつという間であったが、これまで経験したことのない事どもにもその間出会った。

その一つは「看取り」の仕事である。以前は、自宅で家族に見守られながら息を引き取ることが多かったが、最近では80%以上の方が病院で亡くなる。ただ、国の施策もあり、自宅や病院ばかりではなく、介護施設で息を引き取る方も少しずつ増えてきた。みゆきの丘でも、この数年、施設で亡くなる方が増加してきて、

平成28年度は13名、平成29年度も（平成30年2月9日現在）13名の方々が、みゆきの丘で息を引き取られた。ほとんどの方は、いわゆる看取り介護を受けながら最期を迎えている。

そこで、この数回の「光の子」では、自分の経験を中心にして、看取りについて日ごろ考えてきたことを語ってみたい。ただ、稿を進めるにあたり、ここで本格的に看取りの意味等について説明しようとする、なかなか大変である。看取りとは、つまるところ、人間の生死に関わる行為で、場合によっては、一人の人間の生を操作してしまう危険性も無いとは言えないのである。だから、厚労省などが、看取りのガイドラインを決めたりするときも、慎重に慎重を重ねる。ということ、私が大上段に構えて、「看取りとは何ぞや」ということから論を進めるのは荷が重すぎる。

そこで、まずはみゆきの丘で私たちが行っている看取り介護の凡そを語ることから、看取りについての話を始めたいと思う。本来は、人生の最終段階をどのような形で迎えたいかという入所者本人の意向がまずあって、それに寄り添う形で、私たちがお世話をするということが基本であるが、私たちの施設では、現時点ではそのように事は進んではいない。入所されるときに、ご本人の終末医療に関する意志確認を行っている介護施設もあるが、そのようなシステムも

みゆきの丘はまだ備えていないのである。

私がみゆきの丘で経験した典型的な看取り介護は、「誰れさんがご飯を食べなくなってきた」という報告が、介護の現場から上がってきたことがきっかけとなって始まる。まず、介護福祉士・ケアマネ・リハビリスタッフ・看護師・医師（私）などが一堂に会して、摂食障害の状況分析を行う。摂食障害は一時的なものでないのか、そうでないとすれば、飲み込む力はどうなっているのか専門家にチェックしてもらい、一方では、向精神薬の投与などによって、大括りにした意味での食欲の低下が起こっているのではないかな等検討する。

そうした検討の過程を機会あるごとにご家族に説明していく。本来ならば、対応する入所者のあらかじめ決定されている意志に従って肅々と事を進めていくことになるのだと思うが、前述したような私たちの施設の状態では、どうしてもご家族との話し合いが中心になる。そして、最終的に、現状では摂食障害を回復させる見込みがないと判断した時に、私たちは、対応する入所者の今後の介護の方向性について、ご家族との話し合

いを行い、その意向に沿った介護を行っていくことになる。摂食障害に出会った時、ご本人が状況を理解し、ご自分の最終医療に対する考えを表明する能力があるなら、ご本人に意志確認をして、それ以後の方針を決めるべきなのだが、現時点でそれはできていない。

一方、私たちはご家族が意向を決定するのを外から急いたりしないように留意している。なにしろ、ある意味では父や母、夫や妻の命が自分たちの手に委ねられていることになるわけで、そんなに簡単に結論を出すことが出来るはずもないのである。それに、私たちは幸いにも経験したことはないが、遠く離れていた対応する入所者の弟や妹がやってきて、「なんぞのことを言うの。それではお兄さん（お姉さん）を殺すようなものでないの。」と言ったりする話は巷に聞く話である。

私たちはまず「ご家族で良く相談してください」と申し上げる。
(以下次号)



「共育ちカンガルー日記」

(47) 赤帽子

近藤みちる

スイミングスクールのプールサイドで、優希は初めての表彰式に臨んでいた。

「表彰状。近藤優希殿。あなたは八級を合格し、スイミング初級課程を修了しました。その努力を讃えて、ここに表彰いたします」

真新しい赤いスイミング帽を被った優希は、少し緊張した面持ちで賞状を受けると、誇らしげな笑みをその口元に浮かべた。赤帽子は中級課程の証。長い間憧れ続け、ようやく手にした勲章だった。

表彰式を終えた優希に、真っ先に声をかけてくれたのはYコーチだった。このスクールで初めて優希を担当してくれたコーチで、十二級から十一級までの二年間を、優希と共に根気強く歩んでくれた。この日の優希の晴れ姿を、誰よりも喜んでくれている一人に違いなかった。

「優希ちゃんをなかなか進級させてあげられなくてごめんさい」

よくYコーチは、進級テストの後にはわざわざ更衣室まで出向いて、私に声をかけてくれた。テストは二ヶ月に一度、担当コーチが行うことになっていて、優希は最初の二年間、

一度もテストに合格できなかった。

水慣れを目的とした十二級では、頭まで水に沈むことが出来れば合格で、ほとんどの子ども達が一発合格で一級へと進級していった。だが当時の優希には、潜るということが途轍もなく高いハードルで、Yコーチはレッスンのたびに手を変え品を変え、何とか優希に潜るきっかけを作ろうと、試行錯誤を重ねていた。

ギャラリィからそんな二人を見守りながら、私は思っていた。優希がこうして、Yコーチのレッスンを楽しんでここに通い続けていること自体が、どれほど凄いことなのかと。

水しぶきが怖くて学校のプールにも入れなかった優希なのである。そもそも優希とみんなとは違う。みんなの歩幅が十センチだとしたら、優希の歩幅はたったの一ミリかもしれない。そう、うさぎとかめみたいなのなのだ。優希には優希なりの歩みがあつて然り。私はYコーチに手紙を書いた。

「Yコーチへ。いつも熱心で楽しいレッスンをありがとうございます。優希の成長はとてゆつくりで、ミリ単位」です。一年かけて、多少顔

が濡れても平気になり、プールが大好きになりました。優希にとつては、進級と同じくらい大きな成長です。マンネン十二級でも、たとえ泳げるようにならなかったとしても、優希が毎週楽しくここに通えるだけで、私達は十分に満足です」

Yコーチから丁寧なお返事を頂いたのは、それから程なくしてのことだった。

「優希ちゃんのお母様へ。学校のプールを楽しめたとのこと、とても嬉しかったです。この仕事を続けてきてよかったです。でも、99%はお母様の優希ちゃんを思う気持ちと優希ちゃんのやる気です。プールサイドからのジャンプが出来た時、すこい」と思いました。以前お母様から、テストに関係なく水慣れを、とのお話をいただきましたが、コーチという仕事柄、少しでも早く上達をと考えてしまいます。なかなか合格点をあげられない事に落ち込み、悩んでおりました。お母様のおっしゃる、少しずつミリ単位に進んで行く、ということを変更して心に刻み、焦らずご指導してまいりたいと思います。

継続は力なり。いつの日か、優希ちゃんが優雅にクロールを泳いでいる姿を、お母様に見せてあげたいです」

そこには、優希の持てる可能性を

信じ、共に歩まんとするYコーチの真摯な思いが綴られていた。たとえ「ミリ単位」の歩みだとしても、その先には優雅にクロールを泳ぐ未来の優希の姿がきっとあるということ。Yコーチは私達に示してくれていたのである。

優希が十一級に進級したのは、この手紙を受け取ってから、さらに一年後のことだった。合格を告げられた時の優希の嬉しそうな笑顔を見て、私は優希がどれほどこの日を待ち望んでいたのかを改めて知った。Yコーチはその言葉通りに、ミリ単位の優希の歩みに寄り添い続け、実に二年という月日をかけて、正々堂々、合格点を優希にくれたのだった。

それからの優希は「赤帽子」という次なる目標を、はつきりと自信を持って口にするようになった。そしてついに赤帽子を手にした今、クロールの練習に励む毎日だ。優雅に、と言うにはまだまだだが、それでもプールの半分くらいまで泳げるようになった。

あのとき、Yコーチが私達に指し示してくれた、ミリ単位の歩みのその先を、優希は確かな足取りで歩み続けている。

春一番二番三番子が立てり

みちる

先月、或る知り合いの人から、思いもかけない事を言われた。

「ずいぶん以前ですけど、用事でお宅へ伺った時に、表札に『我楽多苦』という文字が書いてあるのを見ましたよ」というのであった。

中島 睦雄

我楽多苦荘など

そうなのである。我が家は、私の父の代に門柱に『我楽多苦』と掛けてあった。

普通『ガラクタ』という表現をする場合、『苦』の文字をはずして『我楽多』として、苦しみを表現したのではないことが多いのではないだろうか。

しかし、父が敢えてその『苦』の字を入れたのには、理由があったのだろうと、私は想像する。

父は、大東亜戦争中に、公職に就いていた関係で、日本の敗戦後、戦争への協力者として、公職から追放された。これは一つの『苦』であっただろう。そしてその上、

日本を占領した連合国軍総司令部によって指令され、農地改革という制度が作られた。その結果、かなりの土地が人手に渡ったのであった。

これも、父にとつての『苦』の一つであつたろうと思う。子どもであつた私には、それらの意味はわからなかつたが、生活の貧しさは日常であつた。

そんなこともあつて「我が人生は、楽しい事ばかりでなく、苦しい事も多くあつたのだ」という意味で、敢えて『苦』の文字を入れて『我楽多苦』としたのではないだろうか、と私は想像する。

しかし、本当に苦しみのド底の生活があつたとしたら、『苦』の文字を避けたのではなからうか。この『苦』の文字を敢えて入れたのは、自分を客観視する心のゆとりがあつたのではなからうか、とも思うのである。

ところで、私にとつての祖父であるが、私は、祖父を知らない。ただ、祖父の肖像画が掛け軸として存在するので、描かれた絵によつて祖父を知るのみである。

この祖父だが、私の家には、以前、母屋の西に離れ家があつた。そこには『空民庵』と書かれた板が掛けてあつた。

なんと、空しい民の庵とは、虚無的な言葉だと思つた。実際の祖父を知らないで、その言葉が、どれ程の意味を蔵しているのかは、全くわからないが、言葉だけの意味を考えると、何か人間としての虚無を感じた生活だつたのだろうかと思う。

経済的には決して苦しくはなかつた筈だからといって人間としての空しさを背負っていたのかもしれない。

そう言えば、当時の祖父には、家の後継者が居なくて、家屋敷等の一切を村に寄付するつもりだつたとのこと。そのうち、どういう風の吹き回しか、親戚筋から養子をもらうことになつたという。それが私の父と、父の妹である。

そんなこともあつたようなので、『空しい民』という言葉が頭のどこかにあつたのであろう。

そこから更に時代が遡つて、私にとつての曾祖父のことになるが、江戸時代末期の頃と思われる文書がある。

これは『出藍堂日記』と呼ばれるもので、当時の村や自分の身の回りの事を書き記したものである。

これは、何年か前に、郷土史を研究する人にとつて、当時の時代の様子がわかるものとして読まれ

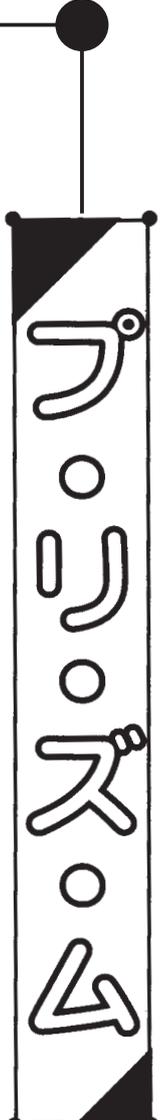
たようである。

これは、出藍の誉れという言葉を意識して名付けたことは確かである。日記を書いている曾祖父が『青』なのか、或いは『藍』のつもりかわからない。いずれにしても、前向きに生きていこうという感じは受け取れる。

ところで、曾祖父から教えて三代目の当主である私は？となると、余り簡単ではない。

私には兄が三人、姉が二人、弟が一人いるのだが、父の死後、私がかの一切を受け継ぐ事になつたのである。どうも、みんなが「あいつにやらせろ」となつたようである。自分としては『貧乏くじ』だと思つた。しかし、みんなの意志なら仕方がない。

私はアトリエを新しく作つた。そこで、何か気の利いた名前をつけなくては、と思つた。『ウルトラ・バイオレット』とでもしようか。訳すと『超濃むらさき』である。しかし、これでは名前負けしてしまう。私は、『青』でも『藍』でもない。単なるポンクラ美術館。そして、私の身のまわりは、文字通りの『ガラクタ』に満ちているのであるから。



プリズム

個々の成長報告 原田家

寒さや乾燥が気になる時期になりました。原田家のメンバー全員が一つになり、風邪やインフルエンザに負けず、予防に気を配りながら元気に過ごしております。

二〇一七年度も残りわずかとなりました。振り返ってみると、それぞれの子どもの成長を肌で感じる事が出来た一年でした。抜粋してお知らせしたいと思います。

まず、四歳の菜々と羊子は、一人でトイレに行くことができるようになりました。小学生の花梨は、就学前に不安視されていた学校生活にも日頃の頑張りで乗り越えてきました。

小学三年の武士は、お姉ちゃんたちがいない時に、妹の世話をしてくれる一面を見せてくれました。小学四年の林檎は、率先してご飯前のお手伝いをしてくれることが多くなりました。小学五年の輝夜は、自らの苦手を学習課題を克服するために、自分で教材を指定し

て、日々取組む姿を見せてくれました。小学六年の楓は、自ら取り組もうとしなかった宿題を、計画的に分散して取り組むことができようになりました。中学三年で受験生の瑠璃は、学習は申し分ないほど励んでいて、苦手な自室清掃にも取り組み、美化意識の向上がはつきりと目に見えて変わってきました。

最後に、子どもの成長は大人の関わり方に左右されるものだと実感しました。しかし、成長したことを手柄にするのは大人ではなく子どもたちです。その手柄が子どもたち自身のスキルになるようお願い、来年度に向かいます。

新吉屋 健太

和み 佐藤家

昨年の十二月中旬、佐藤家に二歳の慎太郎がやってきました！

中高生が多い佐藤家ですが昨年の四月に続き二人目の幼児さんです。平均年齢も精神年齢もだいぶ下がり、今は明るく優しい雰囲気

に包まれています。

いつもイライラしている中学生の良純も、慎太郎の前では眉毛が下がり赤ちゃん言葉で優しい声かけです！入所後すぐに訪れたクリスマスのお祝いは、大きいお兄ちゃんたちに連れられて操り人形のように羊飼いを演じておりました。年末の餅つきではいつもかわいがってくれている高校生の柴子が、喉に詰まらせないように餅をちいさく刻んで口に運んでくれておりました。そして新年を迎え正月が過ぎ、三歳の誕生日をご家族と共にお祝いし二月になりました。そこでは最初の試練、三日の節分がありました。夕食前に突然やってきた鬼に、泣くこともできないくらい恐怖に怯えながらも、豆を投げ何とか成敗！

ここでの暮らしはまだ二ヶ月ほどですが、すっかり馴染み、たくさん経験も重ね、すくすくと成長しております。そして慎太郎の成長と共に周りの優しさも育まれております。

小西 剛史

節分をふり返り 仙道家

暖かくなったり寒くなったりと気温の変化に追いつくのに必死な毎日をご過ごしております。皆様はお変わりないでしょうか？

二月三日は待ちに待った!?節分の日でした！子どもたちは何日も前から、「鬼が来る」とびくびくしたり喜んだりしていました。私は、今年はどうな様子になるのか期待する側でした。

当日の子どもたちは、必死になつて豆を投げていました。年少の重紀は、昨年の節分を号泣しながら迎えましたが、今年は半べそをかきながら豆を自ら一生懸命投げっており、個人的には成長したなと思つて見ていました。この機会に、一年前に鬼が来た時のことを映像記録でふり返つて観てみると、顔つきから体格から変わつていて、一年でこんなに成長しているのだなとしみじみしてしまいました。

重紀だけでなく、小学生の凜、高校生になった仁も一年を通して様々なことがありました。成長し

たこと、停滞していること、これから頑張らないといけないこと。高い壁に当たるときほど力が必要なのだと思えます。私たちがその支えになれば……と関わっていますが……。至らないことは多いですが……。しかし、皆様が支えてくださっているからこそ、子どもをはじめ私たちも前を向けているのだと思います。

最近では、子どもたちも次の学年への意識をし始めた様子が見られています。子どもの成長は本当に早いです。気が付けば、と思うことがあります、その成長を一つ一つを大切に、関わっていきたいと思います。

東宇 沙晃

仮住まい 牧野家

家の改修工事が始まった。耐震工事と浴室のリフォーム、廊下や壁紙、フローリングの貼り替え、サンルームの設置……とかなり大がかりな工事になる。全ての工事が終わるまでの約二ヶ月、五人の子どもたちと共にアパート生活が始まった。家具や家電のほぼ全てを家から運び出し、アパートに収まりきれない物は本園で一時的に

保管、それぞれ最低限生活に必要な物を持って引っ越しをした。引っ越してすぐ、美樹がインフルエンザに罹ってしまった、あつという間に美甘、八恵と続いて体調を崩していった。その後も、環境の変化からか、子どもたちが心身の不調を訴える場面が増えていった。職員宿舎として使っていたアパートの二階を空けてもらい部屋を増やし、二階には佐藤指導員や施設長が宿直を担当するなどできる範囲で対応しているが、なかなか生活に「落ち着いた感じ」が生まれない。

私が十数年前、まだ職員になって一年目だったときに、初めての研修で訪れた施設でこんなエピソードを聞いた。その施設では、当時、地域のグループホームを担当していた二人の職員が同時に退職してしまった。子どもたちが不安定になるのではと心配したけれど、意外と落ち着いて生活を送っているというのだ。理由を聞くと、子どもは意外と「家」に付いていたのかもしれない、普段暮らしている「家」が変わらずにあり続けることは子どもたちにとって、とても意味のあることだった、と職員の方は話していた。それを聞いて

から、私は本当にそうなのかなあ思っていたが、今、実感している、おうちって大切なんだなあ……と。生活とは、誰とどのような関係性で暮らしを作るのかというソフ

トの部分と、住環境を作る「家」というハードの部分、どちらが欠けてもダメなのである。

工事が終わるまであと約一ヶ月。慌ただしい年度末にも重なる。少

牧野 由紀子

晴へ 倉澤家

倉澤家の庭に、露の臺が顔を出しました。去年よりもたくさん出ていて、春がそこまで来ていることを実感します。

六年間生活を共にしてきた晴が、四月から中学生になります。もうそんなに大きくなったのかあと思うと、嬉しさもありますが、寂しい気持ちのほうが勝ってしまします。

それは、晴が本園に移動することになったからです。晴の移動は、中高生の女子が多いグループホームに思春期を間近にした男子がひとり、このまま暮らし続けている

のがよいのかという協議から、他家メンバーや各家の状況などが検討され、決まりました。

そして、私も光の子どもの家を離れ、新たな生活を送ることになりました。共にしてきた生活がなくなってしまうこと、今までのように会えなくなってしまうことを思うと、とても寂しいです。

晴と暮らしてきたこの六年間は、本当にいろいろなことがありました。良い時も悪い時も、一緒に乗り越えたことで晴との関係を築いてこられたと強く思います。残り少ない倉澤家での生活を、大切に過ごしたいと思います。新年度から、それぞれの立場や居場所は変わりますが、これまでの関係が崩れることはないと思っていて、晴の応援者として遠くから見守っていきたいと思えます。晴に会えて良かったと心から思います。

細淵 野宜江



俵万智さんの著書『子育て短歌エッセイ ありがとうのかんづめ』（小学館、2017年）より、映画「隣る人」をとりあげていただいた回を転載いたします。転載をお許しくださいました俵さん、小学館さんに、心より御礼申し上げます。



隣る人に我はなりたし
ひたすらに子を受け止めて
子を否定せず

『隣る人』という映画を見た。さまざま事情から、親と一緒に暮らせない子どもたちがいる。彼らを養育する児童養護施設「光の子どもの家」を舞台に、八年間にわたって撮られたドキュメンタリーだ。

特殊な事情の、かわいそうな子どもの、特別な世界を描いたもの……ではない。およそ子どもに関わる人間なら、すべての人にとっていてほしい「心のありよう」が、ここには描かれている。それを端的に表現したのが「隣る人」という造語だ。ひとこと言えば、ありのままの子どもをどこまでも受け入れ、ひたすらその心に寄り添う、ということになるだろうか。ナレーションも字幕もない映像は、施設の日常をたんと映し出す。なにげない朝の見送りのシーンがあるのだが、私はこの場面が大好きだ。寒くはないか、雨は

降らないか、こまごまとしたこと
を気かけながら、保育士さんは
子どもたちを見送る。振り向いた
ときに、そこに見守ってくれてい
る人がいるという安心感。それが
あるからこそ子どもは前を向いて
進んでいけるのだ。

この映画へのコメントを求めら
れて、私は次のような短文を書い
た。

『どんなムッチャンも好き』。

保育士のマリコさんの言葉です。
そう思ってくれる人が隣にいるこ
と。子どもには、それだけでいい
けれど『それだけ』が非常に困難
になっているのは、今の日本、児
童養護施設に限ったことではない
ように思います。愛情とは、何か
特別なことをしてやったり、まし
て期待したりすることではない。
なんでもない時間を共有し、ひた
すら存在を受けとめること。子ど
もとは、こんなにも愛情を必要と
している生き物なんだと、せつな
く、たじろぐほどでした。

自分は自分の子どもに対して
「どんな〇〇ちゃんも好き」と常
に思っているのかどうか。こんな

子どもになってほしい、という願
いを持つのは自然なことだ。が、
そうならなかったときにこそ、親
は試される。

死別して施設に来たのではない
場合、ふだん離れているお母さん
が、たまに子どもと一緒に過ごす
こともある。再び生活をともにで
きるかどうかのリハビリのような
時間だ。

日常をともにしていないと、実
の親子でもこんなにぎこちなくな
ってしまうのか、と思わせられる
映像が続く。気まずさを埋めるよ
うに母親は、外食に連れ出したり、
唐突に小遣いを与えてしまったり
する。同じ子どもが、保育士さん
に耳かきしてもらってうっとり
しているのとは対照的で、胸が痛
む。

極端な事例のようだが、これに
近いようなことが、今の日本では
起こっているようにも思う。情報
や物質的な豊かさがマックスな時
代。子どものために何かしてやる
ということの「何か」が、情報や
物質的なことで埋めつくされては
いないだろうか。

けれど、一番大切なことは、ひ
たすら「隣ること」なのだ。一番
大切で、そして一番むずかしいこ
とでもあるかもしれない。隣にい

るつもりが、いつか後ろから押し
ていたり、前から引つ張ったり、
上から押しつぶしたり、あるいは
隣とはいえないほど離れていた
り……。

保育士さんたちは、実の親でな
いぶん、過剰な期待を子どもにし
ていない。そこが重要なことのよ
うに思えた。もちろん愛情はあふ
ればかりだが、ただひたすら、
子どもに健やかな日常が訪れるこ
とを願っている。その姿にも打た
れた。

保育士さんの愛情を得ようと、
あるときは本性剥き出しで奪い合
いをする子どもたち。布団に残る
香りに顔を埋める子もいれば、試
すように悪さを繰り返す子もいる。
配置換えになった保育士さんに、
子どもがしがみついて号泣する場
面は、あまりの痛ましさに直視で
きないほどだ。親を失ったところ
からの出発だから、これも極端に
見えるかもしれないが、子どもと
は本来、これほどまでに愛を必要
としているものなのだと思ふべき
である。

子の髪を切りそろえている日曜に
言葉はなくて豊かな時間



菅原の「養護メモ」は休載します。

日頃よりご支援とお心遣いをいただき感謝しております。
当方の収納空間不足のため、食器・布団類のご寄贈は辞退させていただいております。また、名前入りの衣類もお断りしております。失礼をお許し下さい。

光の子どもの家バザー実行委員会

183号のお知らせの欄に掲載した「謹賀新年（金が信念）」のなぞかけに不快に思われた方へお詫び申しあげます。五輪選手（オリンピック選手）にとって金メダルが信念という意味でした。

光の子編集委員会

日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 = 2017年11月～12月

- 2017年12月現在
- 幼児7名 小学生14名 中学生6名 高校生8名 計35名
- 11月
 - 3日 ご支援くださっている方々を招待し感謝の集い。卒園生も来訪。第116回理事会
 - 6日 藤岡孝志氏による施設内研修 感謝
 - 7日 埼玉県児童福祉研究会に佐藤が出席
 - 10日 東大宮教会の久保島泰牧師による夕礼拝 感謝
 - 10日 栃木県にあるネバーランド様見学来訪
 - 11日 温泉同好会開催
 - 12日 中高生一人暮らしセミナーへ
 - 13日 消防署立ち入り検査
 - 13日 性についての勉強会
 - 13日 11月生まれの誕生会
 - 13日 はなこみちより派遣研修
 - 17日 東埼玉バプテスト教会の木田浩靖牧師による夕礼拝 感謝
 - 18日 ヘビ会&肉会開催
 - 20日 原道小学校との懇談会
 - 20日 小舎制養育研究会に古谷が出席
 - 24日 守谷教会の若月健悟牧師による職員礼拝 感謝
 - 26日 恵明学園見学来訪
 - 29日 高校生トレース検定合格!!
 - 30日 軽井沢学園より見学来訪
 - 30日 通報避難訓練実施
 - 12月
 - 3日 大高晋一郎氏による第1アドベント礼拝&夕食会 感謝
 - 10日 佐野正子氏による第2アドベント礼拝&夕食会 感謝
 - 11日 交換派遣研修へ田口が出席
 - 11日 新任職員歓迎会
 - 15日 芹沢美保様より招待いただいたハンドベルコンサ-

- トへ 感謝
- 17日 第3アドベント礼拝&12月生まれの誕生会
- 18日 藤岡孝志氏による施設内研修 感謝
- 20日 派遣研修に東宇が出席
- 24日 クリスマスイブ キャンドルサービス&サンタクロース来訪
- 25日 クリスマスページェント(聖誕劇)&祝会 お客様を招待
- 28日 施設内健康診断
- 28日 餅つき 子どもたちも張り切る
- 31日 大晦日 卒園生も多数来訪し年末を過ごす

<寄贈者各位>

櫻井秀夫 福楽 市川由紀子 阪ひろみ 加部芳子
有限会社マルキチ物産 小林加吉 東地区愛育班
高橋会計事務所 斉藤なおと ネットヨタ埼玉 王子教会
長谷川賢司 古河農友会 鴨川会川村久志 岩槻教会
松本明子 瑞穂陽子 須賀川教会 久木田藤乃 石川俊浩
根岸亜麗朱 高橋幸子 樋口まち子 吉野富士 浜田文昭
日本鏡餅組合 毎日新聞東京社会事業団 木暮伸二
梶原完 奥田のり子 堀江常雄 斉藤直子 鈴木宏子
日本基督教会埼玉支部婦人会 (株)なり (株)ヤクルト
山田智 山田裕子 中島睦雄 東埼玉バプテスト教会
埼玉県図書協会 丸山裕己 稲塚由美子 市川千代子
他多数の皆様

<ボランティア各位>

岡本有代 島崎静子 櫻井秀夫 鎌田洋子 向井進
丹羽健太郎 加藤瑠海 常松洋介 日本青少年音楽芸能協会
山田智 山田裕子 他多数の皆様

☆たくさんのご支援、寄贈に感謝いたします(黒川)

/// // 反 射 光 // //

世の中、梅の花は満開というところですが、光の子どもの家の庭先の梅は、まだ二つ三つ咲いたばかりです☆無事、とはなかなか言い難いですが、この年度も皆様のご支援とお祈りのおかげで何とか暮らして行くことができました☆ありがとうございました☆階段の昇り降りさえ覚えなかった幼児が、転がるように庭を走り回るようになったり、独りランチが辛いと泣いていたり里奈が一人暮らしを謳歌していたり☆どの子も皆、各々の場で成長してくれていることに心から感謝しています☆今年度の途中、大荒れで入所してきた子どもと「あの頃はひどかったよねえ」などと言いながら笑い合える時には、本当に幸せな気持ちになります☆卒園生たちが今、ここでいいはたらきをしてくれていることにも、当初の心配や不安をこえて、幸せと感謝の思いでいっぱいです☆今、いろいろな表現をしている子どもたちですが、目の前の困難を乗り越えていく為の「何か」を探り当てることができるよう祈ります☆それがここで、私たちができることなのか、ということすら迷い、悩んでしまっていますが、逃げたいいけないのだということは肝に銘じていきたいです☆来年度こそ、とも思っています☆今後ともどうぞよろしくお祈りします☆

岩崎